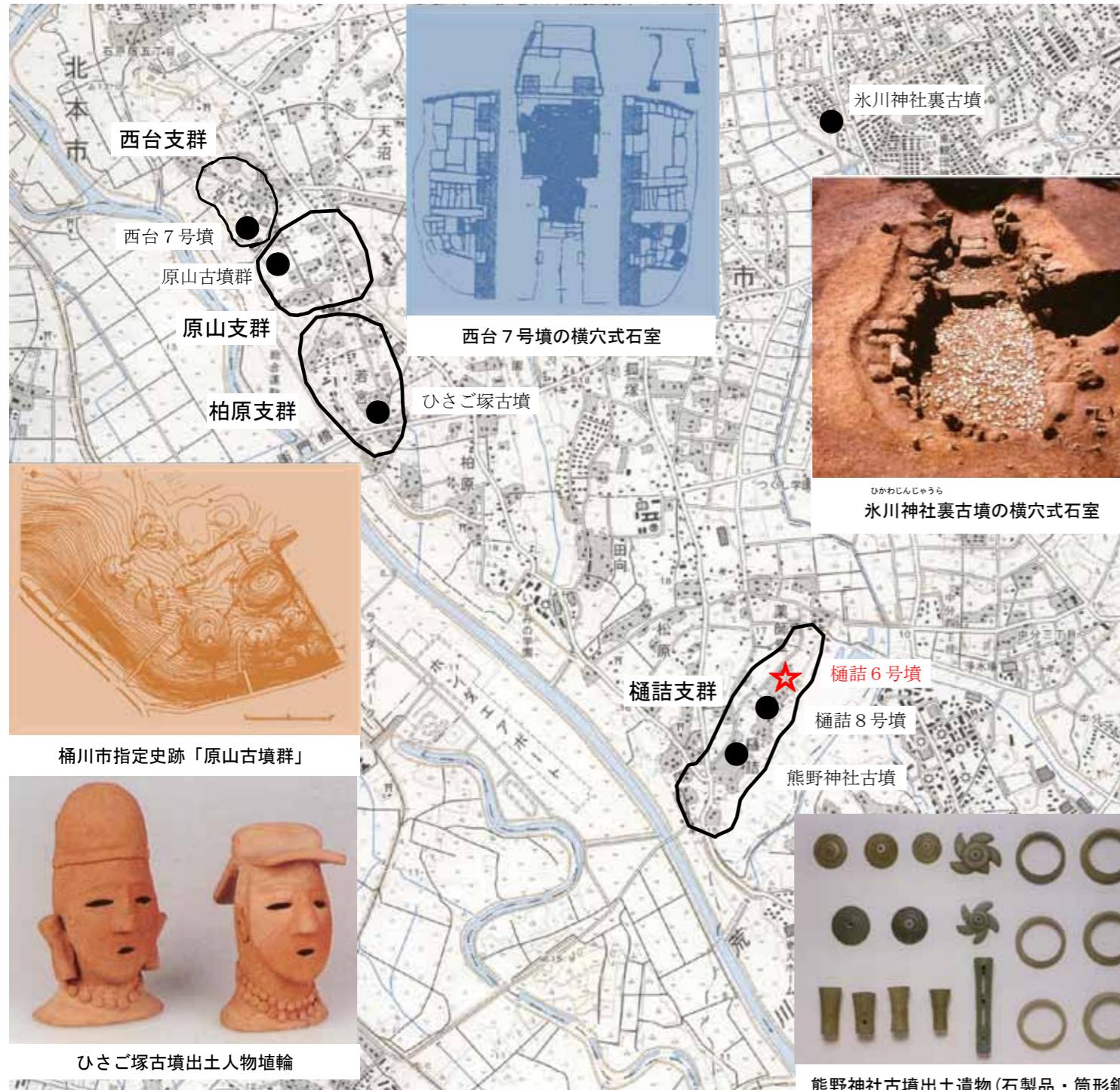


川田谷古墳群

荒川の左岸台地上に展開する川田谷古墳群は、かつて60基以上の古墳が存在していました。現在では、桶川市指定文化財の原山(はらやま)古墳群として親しまれている9基の古墳が当時の面影を今に伝えています。

古墳群は、北から西台(にしだい)支群、原山支群、柏原(かしわばら)支群、樋詰支群の4群に分かれています。楽中遺跡を含む樋詰支群は、前期古墳の熊野神社(くまのじんじや)古墳を中心に8基の古墳が知られています。



熊野神社古墳と副葬品

熊野神社古墳は江川と荒川の合流地点を見おろす台地上にある直径38m、高さ6mの円墳です。昭和59年に発掘調査が行なわれ、出土した土器から4世紀後半に築造されたことが確認されました。

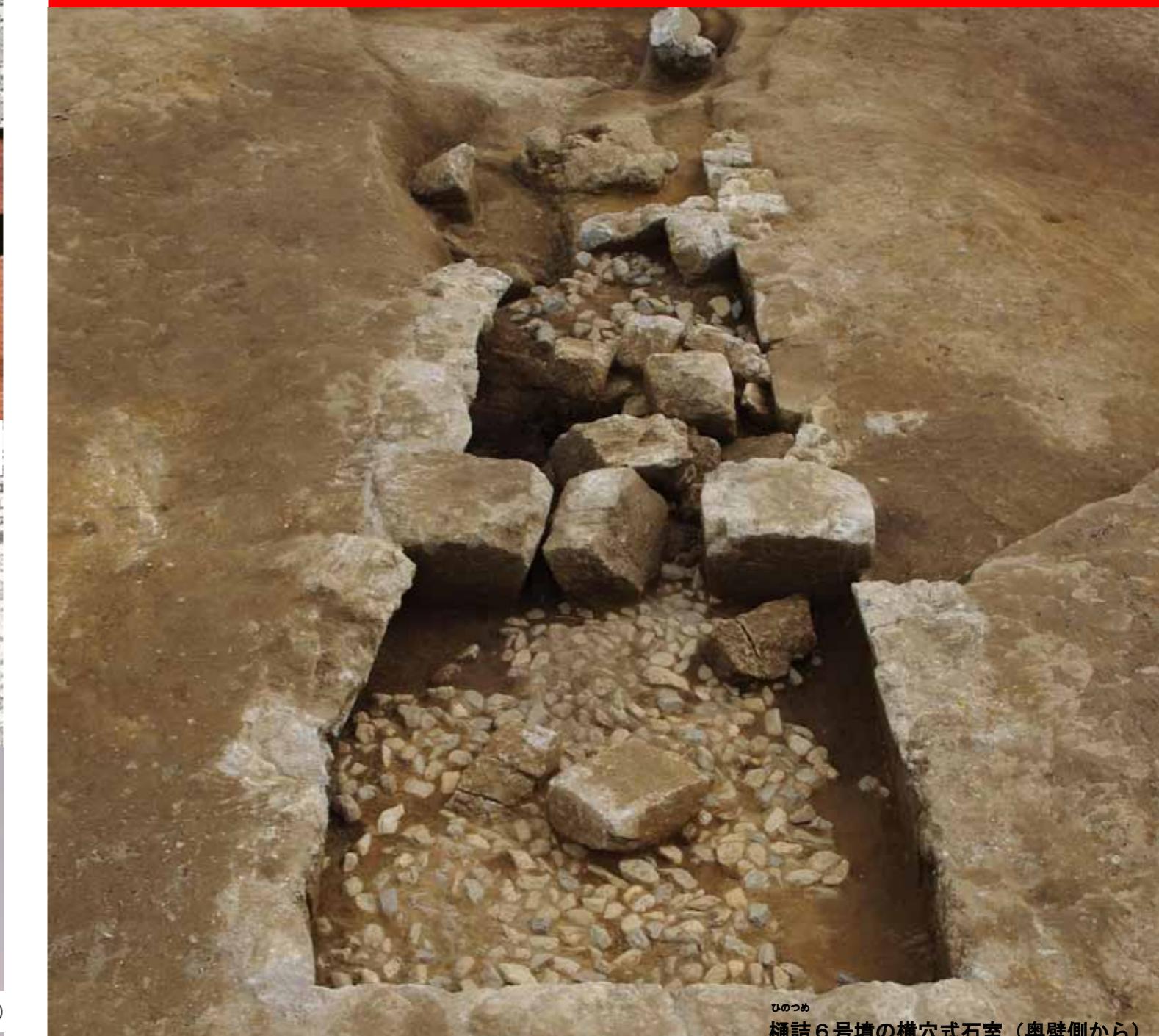
昭和3年、墳頂部の社殿改修の際、玉類、石製品、筒形銅器(つづがたどうき)など、畿内の前期古墳と共に多くの副葬品が出土し、国の重要文化財に指定されています。

桶川市

らく

ちゅう

楽中遺跡



ひのつめ
樋詰6号墳の横穴式石室（奥壁側から）

楽中遺跡は、荒川の支流である江川(えがわ)をのぞむ台地の上に、縄文時代から古墳時代にかけて営まれたムラの跡です。

今回の発掘調査は、一般国道17号(上尾道路)の建設に先立つもので、縄文時代の竪穴住居跡(たてあなしゅうきょあと)や土壙(どこう)などがたくさん見つかっているほか、古墳時代の竪穴住居跡や古墳跡(お墓)が発見されました。

主 催：公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
共 催：埼玉県教育委員会・桶川市教育委員会
協 力：国土交通省関東地方整備局大宮国道事務所

集中遺跡のこれまでの発掘調査の成果



第1号溝跡(江戸時代)
幅4m以上の大きな溝跡です。直角に折れていることから、屋敷などを区画した溝と考えられます。



第3号住居跡(縄文時代前期)

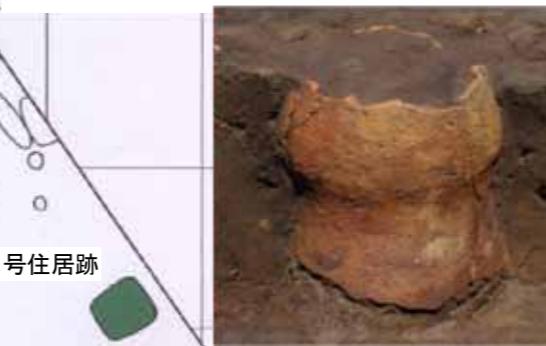
長台形の堅穴住居跡で、炉跡が2か所見つかりました。6本柱の建物に復元されます。

柱穴の中から出土した
縄文土器の破片

第5号住居跡(古墳時代後期)
北壁の中央にカマドをもつ堅穴住居跡です。カマドの中から30点をこえる土玉が出土しました。



第8号住居跡(古墳時代前期)
一辺3mほどの小型の堅穴住居跡です。炭化した柱材などが出土していることから、火災にあったことがわかります。



第1号埋甕(縄文時代後期)
土器が逆さまの状態で埋められていた。



第5号住居跡



カマドの中から出土した土玉



第2号住居跡(縄文時代前期)

ひの つめ 横詰6号墳の発掘調査

調査区のほぼ中央に横詰6号墳があります。すでに墳丘は削平されていましたが、横穴式石室を埋葬施設(まいそうしせつ)とした直径約16mの円墳であることが明らかになりました。

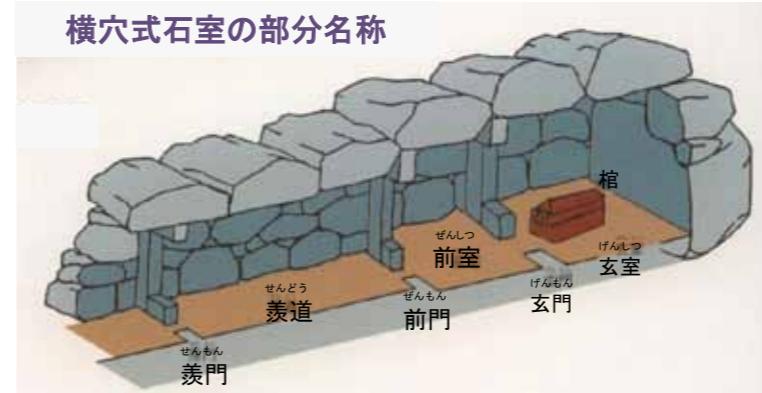
横穴式石室は、ブロックのように加工した石材を積み上げた切石(きりいし)積みの石室で、墓室の部分が玄室と前室の二室に分かれる複室構造のものです。使用された石材は「硬砂」(かたずな)と呼ばれる大宮台地に特徴的に見られる石材が用いられたようです。残念ながら石室の中からは、副葬品(ふくそうひん)は出土しませんでした。

死者を埋葬する際、石室の入口部には大勢の人々が集まり、どのような「お葬式」を行ったのでしょうか。



横穴式石室の大部分は壊されており、石室の石積みが1~2段分残っているだけでした。

横穴式石室の部分名称



横穴式石室とは…横穴式石室は、古墳の側面に入口を設けた墓室のことをさします。ふさいでいた入口を開くと新たな棺を運び込むことができ、この行為は追葬と呼ばれます。

玄室(げんしつ)：遺体をおさめる部屋(墓室)

羨道(せんどう)：玄室に通じる通路



横穴式石室は、ほぼ真南に開口しています。



奥壁は3石で構成され、真中に大きな石をすえていました。



玄門石は、厚みのある石材を突き出すように置いています。



前門には大きな石を置いて、入口をふさいでいたと考えられます。羨道は小振りの石材が用いられていたようです。